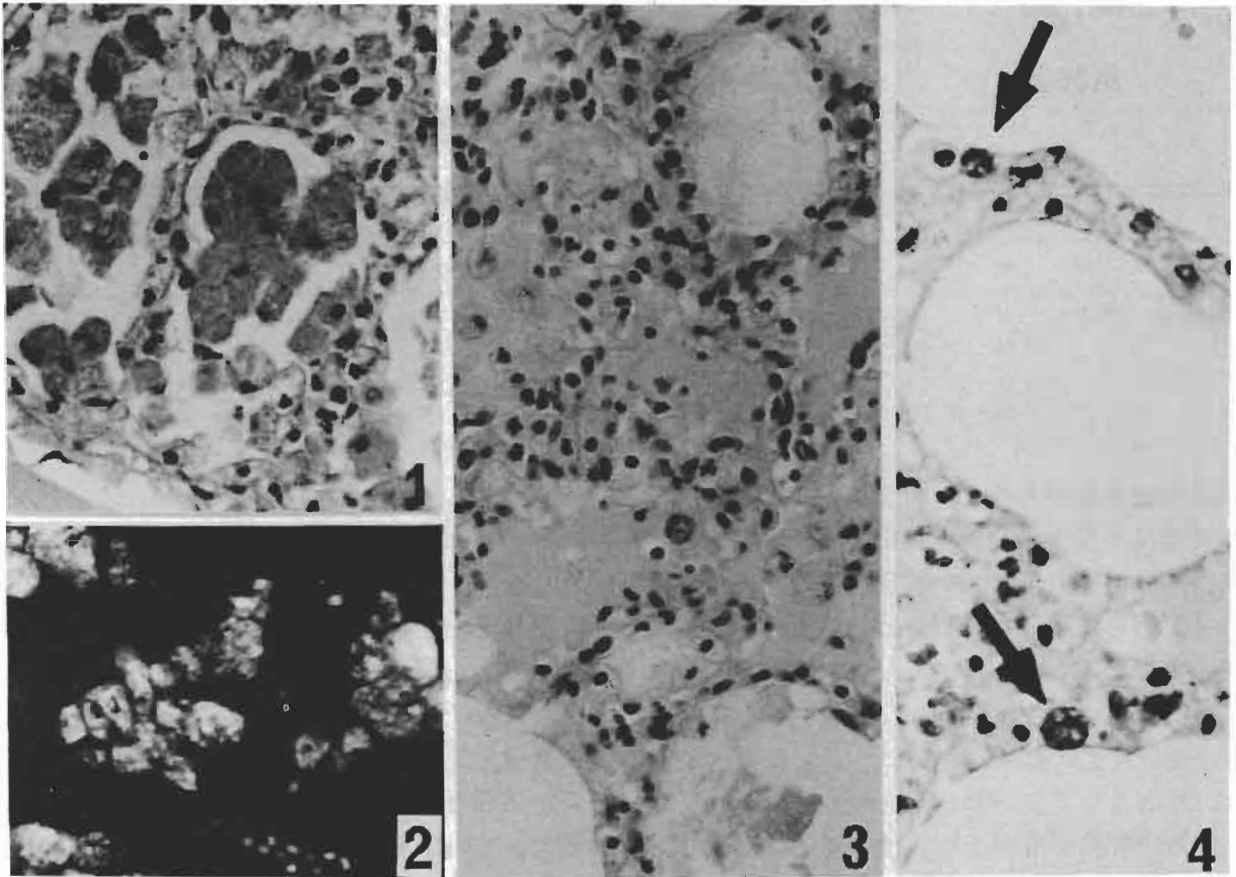


リスザルの肺

山口大学農学部家畜病理学教室出題 第30回獣医病理学研修会標本No.536



動物：リスザル，雌，6歳。

臨床的事項：県下の某公園に長期間飼育されていた10頭中4頭が朝から夕方にかけて次々に死亡したうちの1頭。生前若干の元気消失がみられた以外には特に異常はなかったという。

主要剖検所見：可視粘膜貧血。赤色透明の胸水と心嚢水が少量貯留。肺は全体にうっ血性水腫を示し、辺縁部は気腫状。気管支腔内には多量の泡沫を容れていた。肝は剖面赤褐色。脾は軽度腫脹し、脾材・濾胞は不明瞭。腎及び盲腸漿膜面には点状出血が散在。大脳左側脳室は軽度拡張し、脳脊髄液は軽度増量。

組織学的所見：提出標本で、まず目を引くのは肺胞腔内、ときに中隔や気管支腔内に散在性に数個～10数個の単位で存在する大型単核細胞の細胞質中に小顆粒状から大きな顆粒状のやや透明感を有する淡黄色から黄褐色の色素の沈着がみられることである（写真1，HE，×340）。これらの色素の一部にはヘモジレリンが検出されたが、大部分はズダン好性、抗酸性、黄白色の自家蛍光（写真2，未染，UV，×340）を発し、ナイル青(pH2.5)で青色に染色されることからセロイド色素と考えられた。また

この色素保有細胞の由来は、非特異的エステラーゼで染色され、 α_1 -アンチトリプシンが細胞質に証明されることからマクロファージであろうと思われた。色素沈着以外の基本的な肺病変は中隔のうっ血と間質及び肺胞腔内に漿液の貯留した水腫性的変化であった（写真3，HE，×340）。中隔には少数の好中球，好酸球，マクロファージ，リンパ球及びプラズマ細胞の浸潤がみられた。肺胞腔内には前述した少数の炎症細胞や線維素の滲出の他，肺胞上皮の剥離がみられ，所によっては肺胞上皮の立方化や増生もみられた。以上のような細胞反応を伴った部位あるいは細胞反応を欠く部位の肺胞上皮，マクロファージや血管内皮細胞質内外にはシュードシストや増殖した虫体がみられ，これらの虫体は抗トキソプラズマ・ゴンジ抗体で陽性に染色された（写真4，矢印，BSA法，×460）。
考察及び診断：本例は肺に限局したセロイド沈着と全身性のトキソプラズマ感染がみられた症例であった。本例における限局性の肺セロイド沈着の病理発生は不明であるが，ヒトでは原発性及び続発性の肺セロイド沈着症が知られている。診断はリスザル肺のセロイド沈着とトキソプラズマ感染がみられた肺水腫。